

座禪洞だより

■ 岐阜環境医学研究所・座禪洞診療所
 ● 呼吸器疾患・禁煙治療・漢方相談
 診 察 日：月曜・木曜・金曜
 受付時間：9:00~12:00、
 〒502-0017 岐阜市長良雄総878-16
 IP Tel:058-295-9545
 FAX:058-296-3903
 E-mail:zazendoh@ccn.aitai.ne.jp
 http://zazendoh.town-web.net/

147号 2016.6.1.
 毎月1回発行 座禪洞診療所 松井英介

そのとき広島で

松井英介



図:4)より引用

「これらの病院で私は、原爆が落ちた時には負傷もなかったのに、今になって、わけのわからない後障害のために死んでいく人びとを見た。これといった理由もなしに健康が衰えはじめ、食欲を失ない、髪の毛は抜け落ち、体に青みをおびた斑点が現われ、耳から、口から、鼻から、出血が始まるという。医師たちははじめ、単なる衰弱だと思ったそう。そしてビタミン注射を打ったところそれはひどい結果に終わった。注射器の針があけた穴からどんどん肉が腐り始めたのである。そしてその注射を受けた犠牲者はすべて死んだ……」¹⁾。これは、肥田舜太郎医師が診た、無念な思いを抱いて息を引き取っていった大勢の被爆者そのもの！そして、肥田さんをして「内部被ばく」の研究に駆り立てた症状そのものではないでしょうか。

この文章は、気骨のジャーナリスト、W. バーチェット (Wilfred Burchett) が大変な苦難と出会いながら、東京から単身列車で広島に入り、すぐに逡信病院を訪れ、タイプし、イギリスに送った迫真の現場報告の一部です。この記事は、1945年9月5日付デイリー・エクスプレスの1面と2面に掲載され、世界中から大きな衝撃をもって迎えられました。同紙1面トップの見出しは、次のようです。「原爆疫病。The Atomic Plague. 『私は世界への警告として、これを書く』 'I write this as a warning to the world' 医師たちは働きながら倒れる」¹⁾。

バーチェットは、広島に来る前、戦時下中国の臨時首都・重慶に派遣されていました。そこで彼が観たものは「世界中で最も爆撃を受けている都市」¹⁾。皇軍が1938年以降5年以上にわたって計画的に強行した人類史上初の無差別戦略爆撃「空からの戦争」に晒された街でした。

このほかに、ぜひ思い出していただきたい事実があります。

「広島・長崎では、死ぬべきものは死んでしまい、九月上旬現在において、原爆放射能のために苦しんでいるものは皆無だ」。これはファーレル准将 (マンハッタン計画副責任者) が、1945年9月6日東京帝国ホテルで連合国の海外特派員に向けて発表した声明です²⁾³⁾⁴⁾。

この考え方は、3.11原発大惨事後5年以上経過した今なお、年間20ミリシーベルト基準を撤回せず、子どもたちに被ばくを強要する安倍政権に受け継がれています。

(2016-05-27 オバマ大統領広島初訪問の日に)

【参考文献】

- 1) W. バーチェット [著] 成田良雄/文京洙 [訳] 『広島TODAY』 (1983年) 連合出版, P. 50 & P. 32
- 2) 椎名麻紗枝 [著] 『原爆犯罪—被爆者はなぜ放置されたか—』 (1985年) 大月書店, P. 61~4
- 3) 高橋博子 [著] 『増補新訂版封印されたヒロシマ・ナガサキ—米核実験と民間防衛計画—』 (2012年) 凱風社, P. 49~53
- 4) 木村朗・高橋博子 [著] 『核の戦後史—Q&Aで学ぶ原爆・原発・被ばくの真実—』 (2016年) 創元社, P. 159~173